# しずおか新聞感想文コンクール 入選

## 高校生の部

### フィクション

朝日新聞8月6日
「被爆再現人形フィクションを問う　美術家・菅亮平さん個展」

**小林 さわ さん**　富士高1年

「被爆再現」「人形」その言葉に軽いショックを受けた。新聞をめくる手が止まった。

その記事は、美術家、菅亮平さんの個展についてのものだった。新聞の画像を見て気になった私は、インターネットでも個展の画像を見た。

そこには、モノクロ画像より鮮明にわかる、ただれた肌や、溶けたような手が映る。まるで七九年前に燃え盛る街を歩いていた人々を本当に見たかのような衝撃が走った。しばらくは心が締めつけられていた。

これまで、学校の授業でも、ニュースでも、原爆の悲惨さや、当時の人々の辛さを学んできたが、ただ知識に過ぎなかった。原爆の話でよく聞くのは、「当時の人の思いを考えるべきだ」といった言葉だ。だが、黙ってこんな自分に罪の意識すらも感じる。

あの日、苦しみながら、悲しみながら、生きた一人の人間。ショックを受けていてこれほどの苦しみでとどれほどの怖さなのでしょうか、「目を閉じるな」と、まるでフィクションで、多くの思いが込められている。

菅さんの作品の展示には反対の意見も多く、公開は二〇一七年に終了したこのことだった。今、私は強く疑問の意見を言いたい。

確かに、フィクションの作品だから、事実の間違った伝えてしまうかも知れない。だが、菅さんの作品がなければ、私は被爆者のことを思い、考えることなどなかったと思う。もし、フィクションの作品が事実を曲げて、大切な人を失くさんなものであるなら、「皮膚が焼けるる」と言われていたとしても、私が持った感情は大切なものであることに変わりはない。間違っていると言われたとしても、私の持った感情は大切なものであることに変わりはない。ただそれフィクションであっても、この感情を抱かせる作品には大きな価値があると思うのだ。

「原爆の痛みや恐怖を人々に印象づけるという、人形のフィクション」と言さんが持つ機能を検証したいと言っていた。人形の人形の展示ができなくなってからは、体験した人以外、絶対にたどり着けないという事象を「空白」として設定し、人形のない空の木箱を展示しているという。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

人形の展示ができなくなってからは、体験した人以外、絶対にたどり着けないという事象を「空白」として設定し、人形のない空の木箱を展示しているという。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

封鎖されたり花火大会が中止になったりした世間は不安でいっぱいだった。しかし、調査終了と発表された時、私は解放された気持ちになった。地震が来る可能性が無くなったわけではないのに、危険は去ったかのように、そうなった。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

人形の展示ができなくなってからは、体験した人以外、絶対にたどり着けないという事象を「空白」として設定し、人形のない空の木箱を展示しているという。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

### 正常性バイアス

静岡新聞8月29日
「災害に備えなし46%」

**大石 侑奈 さん**　常葉大常葉高2年

正常性バイアス、最近はこの言葉をよく目にするようになった。危機的状況に直面しても、自分にとって都合の悪い情報を無視したり過小評価したりすることで、正常な状態のことを指す。これは災害時においてはマイナス働くことが多い。

記事は自分だけは大丈夫という理由により、災害に対する備えが十分なされていない人が多くある。家庭の防災対策の実施状況として、特に何もしていないと答えた人が最も多いことに驚きと危機感を覚えたのと共に、一つ気になったのは、それ備えがあると回答した人の9パーセントは、この一年の防災関連の支出が0円ということだ。防災備蓄があるから大丈夫といって、消費期限の確認や定期的な交換がされていないとは思わない。

しかし、私は国や地域対抗して、開発を進めていることに疑問を持った。今日、様々な場面で国、地域同士が対立している。目に見えやすい戦争だけではなく、文化関係からも見て分かるように、対立が生まれかけているのが分かる状況である。実際にも、地球上で関係が険悪化している国々は、宇宙開発でも足並みがそろっていない。国際競争が激化は開発の速度を速めるせる一方で、互いの溝が深くなる要因になっている。

この現状が、小学校の頃から授業で習ってきたようなヨーロッパの国々の姿と重なって見えた。住み慣れた国を飛び出し、我先にと優良地を得ようとしていた状況である。それが数年前まで、通過型観光地として知られていた通過観光地として知られている繁栄はもちろん、滞在型観光地への発展も見込める。富士山はいわゆる「通過型観光地」として、人々に希望が与えられた。静岡県と共に発展が進み、富士市を結び、展に導き、書道と富士市を結び、地域の人々への助力を提供したかがわ橋は多くの架け橋となった。かがわ橋のような架け橋が増加し、人々の交流が増える。それは単なる物理的な橋ではなく、人と人、国と国などの間の橋を見つけることができる。やがてくるは大切な人や仕事を得て自分なりの架け橋を渡していくのである。私は小中学校の先生方に多くの橋を架けてもらった。正しい方向を示して道を渡してくれる素敵な先生方のようには私もなりたいと思った。

この前事を読んで、私は目の前で起きていることだけではなく、その後に起こりうることを考えて行動することが大切だと分かった。そして私自身が、大人になるうえで自分や身近な人のころだけでなく、広い視野を持って責任できる人になりたいと思った。

### 国際競争による宇宙開発の発展と分断

静岡新聞7月10日
「欧州アリアン6初成功」

**植田 真琴 さん**　浜松市立高1年

ヨーロッパが新しい人工衛星、アリアン6号の打ち上げに成功した。これまで使われていたものの後継機で、予定より遅れたが打ち上げられた。これから、人間は宇宙に夢を抱き、観察・観測を続けてきた。今では経済力のある国々を中心に宇宙開発が進んでいて、とても注目を集めている分野である。

しかし私は国や地域対抗して、開発を進めていることに疑問を持った。今日、様々な場面で国、地域同士が対立している。目に見えやすい戦争だけではなく、文化関係からも見て分かるように、対立が生まれかけているのが分かる状況である。実際にも、地球上で関係が険悪化している国々は、宇宙開発でも足並みがそろっていない。国際競争が激化は開発の速度を速めるせる一方で、互いの溝が深くなる要因になっている。

この現状が、小学校の頃から授業で習ってきたようなヨーロッパの国々の姿と重なって見えた。住み慣れた国を飛び出し、我先にと優良地を得ようとしていた状況である。それが数年前まで、通過型観光地として知られていたように、通過観光地として知られている繁栄はもちろん、滞在型観光地への発展も見込める。富士山はいわゆる「通過型観光地」として、人々に希望が与えられた。静岡県と共に発展が進み、富士市を結び、展に導き、書道と富士市を結び、地域の人々への助力を提供したかがわ橋は多くの架け橋となった。かがわ橋のような架け橋が増加し、人々の交流が増える。それは単なる物理的な橋ではなく、人と人、国と国などの間の橋を見つけることができる。やがてくるは大切な人や仕事を得て自分なりの架け橋を渡していくのである。私は小中学校の先生方に多くの橋を架けてもらった。正しい方向を示して道を渡してくれる素敵な先生方のようには私もなりたいと思った。

この前事を読んで、私は目の前で起きていることだけではなく、その後に起こりうることを考えて行動することが大切だと分かった。そして私自身が、大人になるうえで自分や身近な人のころだけでなく、広い視野を持って責任できる人になりたいと思った。

### 人々を繋ぐ架け橋へと

岳南朝日新聞3月10日
「富士川かりがね橋の開通祝う」

**深沢 優来 さん**　富士高2年

筆に墨を含ませ真っ白な紙に文字を書いていく。慎ん重ねた練習と祝賀の気持ちを込めて十八人で書き上げた作品は武典花束贈呈される。私たち書道部は、富士川かりがね橋開通式でのパフォーマンスの依頼を頂き、記念式典の開通の瞬間に立ち会った。富士市岩本と同市原を結ぶ富士川かりがね橋は周辺の慢性的な交通渋滞緩和、災害時の運搬路・緊急物資輸送路として の利用などの目的で建設され、多くの人の支えとなることが期待されている。日本は世界有数の地震が多く、特に静岡県は南海トラフ地震による被害が懸念されている。物資を届けた人々の命を救う架け橋ができたことで人々の不安が少しも減ったと思う。それに加え、観光客増加にもつながることも期待できる。富士川かりがね橋の辺りの富士、富士宮市は観光客が短時間滞在して帰っていく通過型観光地として知られている。繁栄はもちろん、滞在型観光地への発展も見込める。富士川かりがね橋ができたことで地域間交流や経済の活性化において人々に希望が与えられた。静岡県と共に発展が進み、富士市を結び、展に導き、書道と富士市を結び、地域の人々への助力を提供したかがわ橋は多くの架け橋となった。かがわ橋のような架け橋が増加し、人々の交流が増える。それは単なる物理的な橋ではなく、人と人、国と国などの間の橋を見つけることができる。やがてくるは大切な人や仕事を得て自分なりの架け橋を渡していくのである。私は小中学校の先生方に多くの橋を架けてもらった。正しい方向を示して道を渡してくれる素敵な先生方のようには私もなりたいと思った。

この前事を読んで、私は目の前で起きていることだけではなく、その後に起こりうることを考えて行動することが大切だと分かった。そして私自身が、大人になるうえで自分や身近な人のころだけでなく、広い視野を持って責任できる人になりたいと思った。

### 絵本が伝えてくれるメッセージ

毎日新聞4月27日
「本はともだち　雲で描く生と死」

**増田 咲愛 さん**　掛川東高3年

また自分で文字を読むことできなかった頃、絵本を読み聞かせてもらうのが大好きだった。寝る前に父や母が膝の上に布団の中で声に出して話してくれたストーリーは今も鮮明のように私の心の中に残っている。保育園に通い、絵本、おもしろい、怖いそれぞれの本の続きを知っていても、本を読み聞かせてもらうのが楽しかった。

友達間が待ち受けているのかワクワクして、心が刺激される時間だった。絵本を片手に読み聞かせをねだる私に父や母が応えてくれた時間が私にとって大切なものだった。あの頃読んだ絵本を今でも時々読み返したりする。本を開くとあの頃のワクワクした感覚がよみがえってくる。絵本は私の中で特別な意味を持った存在なのだ。

「原爆の痛みや恐怖を人々に印象づけるという、人形のフィクション」と言さんが持つ機能を検証したいと言っていた。人形の人形の展示ができなくなってからは、体験した人以外、絶対にたどり着けないという事象を「空白」として設定し、人形のない空の木箱を展示しているという。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

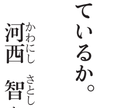
人形の展示ができなくなってからは、体験した人以外、絶対にたどり着けないという事象を「空白」として設定し、人形のない空の木箱を展示しているという。

たとえ、ショックとは違った切なさや、ためらいを感じた。

## 中学生の部

### ネットは「リアル」を越えているか。

朝日新聞7月22日
「まちの書店　在庫はスマホで」



**河西 智 さん**　富士元吉原中3年

読書の際、「本のページの厚み」というものを気にしたことがあるだろうか。ページが進むにつれ、ページの厚みが増していくというものだ。

ページの厚みが増していくことも増えてきたこの頃、僕が紙の本を読む理由の一つにこれから電子書籍で本を読むことを考えさせてくれたのだ。

紙の本を手に入れるための書店は年々減少傾向にあるそうだ。実際、僕の住んでいる富士市でも、小さいリアルな書店が閉店した。そのような中、出版業界では、スマホの位置情報を利用して近くの書店にある本の在庫を「見える化」する取り組みを始めていると知ったのだ。

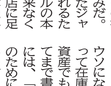
しかし、紙の本を手に入れるためにわざわざ書店に足を運ぶことの良さは、一番書店員さんがわかっていると思う。だからこそ、紙の本を強く、このような取り組みにつながったのではないかと思う。

今、どの業界でもインターネットにより「リアル」な店舗が減っている。僕は全てがインターネットに移行することはないと思う。必ずインターネットにはない強みや良さを見出している人がいるはずだ。実際に、紙の本について僕は「ページの厚み」という魅力を見出し、書店を利用している。

何もかも利便性をインターネットだけを利用してもよいのだろうか。改めて「リアル」の良さを見出すことは、情報化社会への移行期間である今、大切なことだと思う。

### 食品ロスを減らすために

静岡新聞6月22日
「食品ロス経済損失4兆円」



**石田 みなみ さん**　湖西鷲津中3年

「四七二万トン」。これは、二〇二年度の国内の食品ロスの推計である。あなたはこの数を多いと思うだろうか。

食品ロスとは、まだ食べられるのに廃棄される食べ物のことだ。例えば、小売店での売れ残り、飲食店での食べ残し、家庭から出る賞味期限切れ、食材の廃棄などがあげられる。先ほど述べた日本の食品ロス四七二万トンは、世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた四〇億万トンに匹敵するとも言われている。つまり、世界中に飢餓に苦しむ人々がいるなか、日本ではそれに匹敵する量の食品を破棄しているのである。

世界では、宗教や民族、考え方の違いから戦争が起こることがしばしばあります。そんなニュースを見たり、おたがいに分かり合うことは、とてもむずかしい問題であるように見えます。

そのように考えた理由は、ある新聞記事がきっかけでした。かつて太平洋戦争では神風という名の特別攻撃隊が戦争に使われていました。しかし今ハワイの地で、沖縄戦の当時の状況を特別展として展示されていました。

「四七二万トン」。これは、二〇二年度の国内の食品ロスの推計である。あなたはこの数を多いと思うだろうか。

食品ロスとは、まだ食べられるのに廃棄される食べ物のことだ。例えば、小売店での売れ残り、飲食店での食べ残し、家庭から出る賞味期限切れ、食材の廃棄などがあげられる。先ほど述べた日本の食品ロス四七二万トンは、世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた四〇億万トンに匹敵するとも言われている。つまり、世界中に飢餓に苦しむ人々がいるなか、日本ではそれに匹敵する量の食品を破棄しているのである。

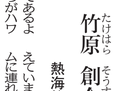
世界では、宗教や民族、考え方の違いから戦争が起こることがしばしあります。そんなニュースを見たり、おたがいに分かり合うことは、とてもむずかしい問題であるように見えます。

そのように考えた理由は、ある新聞記事がきっかけでした。かつて太平洋戦争では神風という名の特別攻撃隊が戦争に使われていました。しかし今ハワイの地で、沖縄戦の当時の状況を特別展として展示されていました。

### 小学生の部

### おたがいを分かり合う

静岡新聞6月11日
「ひめゆり館海外発信強化　ハワイで特別展伝承模索」



**竹原 創介 さん**　熱海第二小5年

えていま す。広島の原爆ドームに連れていってもらったときの、ほの暗い気持ちもわすれていません。今も戦争で百万人もの人が苦しむことになっていると聞きます。戦争の兵器を確保するために、国のお金は使われ、満足に食べることもできなくなる人もいると聞きます。そんなことを知ってしまったからには、ぼくらの身の回りの幸せはいまだに感じます。

だからこそぼくは、ハワイと沖縄のように、おたがいのことを分かり合うことが大切なのだと思います。ぼくは身の回りから考える方を改めようと思います。例えば、ぼくの目の前に、増田凌大、増田凌大、小沢太成、小沢馬中中1、小沢太成（静岡市静岡市）、増田凌大、増田凌大、増田凌大